



TITLE:

<大會抄録>禮忠簡と徐宗簡再論

AUTHOR(S):

永田, 英正

CITATION:

永田, 英正. <大會抄録>禮忠簡と徐宗簡再論. 東洋史研究 1995, 54(3): 560-561

ISSUE DATE:

1995-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154525>

RIGHT:

共の福利に盡力した人物でもあった。こうした活動の延長上に、この「軟擡」という制度も構想されたのだった。

この時期から清初にかけて、江南では「均田均役」の改革が實施された。一條鞭法後の地方經費問題に對處するという意味では、「軟擡」も「均田均役」も、同一の財政的土壤の上にあらわれたものである。私見によれば、こうした一條鞭法後の徭役改革は、「存留」と呼ばれることになる正規の地方經費の硬直性を彌縫する性質のものであるが、こうした文脈のなかで「軟擡」をどのように位置づけることができるか、考えてみたい。

ベトナム紅河デルタ村落史資料について

桜井 由躬雄

一九九〇年代にベトナム史研究は、いわゆる資料革命といわれる時代を迎えた。八〇年代以前にはほとんど不可能だった漢喃研究所所藏資料の公開をはじめ、一九世紀ベトナム研究の第一資料と思われた『大南寔錄』の元となった「阮朝硃本」、阮朝の各村落別地簿、俗例（村落傳統法）、家譜、碑文集成などの大量の資料の利用が可能になった。またフランス時代では各地の理事官文書の公開により、植民地時代の各村落の状況があらかになった。このためにベトナム史研究はまったく新たな段階に入った。九三年より始まった阪大の桃木至朗助教を代表者とする紅河デルタ歴史資料探求プロジェクトは、聞き取り、測量のような地域學的な資料収集のほか

に、村落に保存されている歴史資料の収集につとめ、とくにナムハ省ウーバン縣舊バックコック村において以下のような資料を発見、収集した。(1)各種合作社關係資料、(2)家譜、(3)碑文寫眞、拓本、(4)位牌、(5)祀堂、廟など宗教建築物に残る額、聯、(6)敕封(神靈への贈位書)、不動産關係文書。現在、この作業は繼續中である。本發表では、このような新出資料により、どのような紅河デルタ村落史の展望が開けるか、研究を例示する。

- (1) 各文書館の詳細については、拙稿「ベトナムにおいて新たに公開された漢籍資料について」『東方學』八八、一九九四。

禮忠簡と徐宗簡再論

永田 英正

居延漢簡は漢代史研究の貴重な史料であるが、中でも特に研究者の關心を集めている簡が幾つかある。居延舊簡中の所謂禮忠簡と徐宗簡は、その一例である。

禮忠簡は候長禮忠について奴婢の數、宅地や田地の面積、牛馬や牛車の數、それに各價格を記し、また徐宗簡は遼長徐宗について家族構成のほか宅地や田地の面積、用牛の數、それに各價格を記したものである。兩簡のこのような記載内容からして、かつて兩簡を以て財産税の申告書だとする見解が示された。しかしその後の検討で

は財産税の申告書説には疑問が多く、これは禮忠や徐宗等の吏の身上書的一種ではないかという見解が出されたが、その場合でも身上書だとする決め手はなく、兩簡の性格については二説が並存したままであつた。ところが一九七三～七四年に發見された居延新簡中に兩簡の表題簡と見られる「累重督直官簿」が存在し、これが伐閼簿

とセットになっているところから、兩簡は吏の任用もしくは資格に關係のある記録簿であることが判明した。但し、問題はこれで全て解決したわけではない。居延新簡の發見は、同時に兩簡に關連して更に新たな問題を提起した。新たな問題點と、また簡牘研究の基本的な態度についても併せて述べることにする。